
お約束家族

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お約束家族

【Nコード】

N1643B

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

何気ない朝のはずだったのに、お父さんが学校に行かせてくれな
い。なぜ？そこには重大なお約束事が隠されていた。

東の空を赤く染めながら昇る日。
日の光が差し込むカーテンの隙間。
隙間から伸長し、やがて私に達する光。
光を感じ、そこから暖かさを享受する頬。
頬からの温もりが伝えるさわやかな目覚め。

……まだ目覚まし鳴らないのかなあ。
よし、それじゃあ少し早起きしちゃう。
まずは目覚まし止めなきゃ……
私は目覚ましを手を取った。

「え!?! ……ちょっと!! 目覚まし止めたの誰?!」
目覚まし時計の時間はすでに学校へ遅刻か否かギリギリの時間。
私はベッドから飛び降り、慌てて服を着替える。
髪はボサボサ。服はヨレヨレ。低血圧で頭フラフラ。もう最低!!
制服へと着替えながらふと背後からの視線に気付く。
タイミングを計り振り向くと部屋のドアが急いで閉められる。

「よく毎日、毎日覗いて飽きないなあ」
ため息混じりに独り言を呟く。
誰が覗いていたのかはすぐに分かった。
さっそく問い詰めるため着替えを終えた私は急いで部屋を出てキッチンへ向かう。

キッチンに入ると味噌汁の匂いが私の包む。
どうして、昼食や夕飯には味噌汁の匂いがあまりしないのだらう?

でも、これがあるから感じられる今日の始まりだよな。
……って、浸ってる暇はない。すぐに犯人へ大声で怒る。

「もーっ！！ 目覚まし止めたのお母さんでしょ！！」

私の言葉なんてお構いなしに、食事の用意をしながら母は落着いていた。

「当たり前です。今日はそういう日なの」

意味無く腰に手を当て胸を張る母に腹が立つけど、今はそうもいってられない。

「とにかく、もう行くからね」

「待って、ちゃんと朝食をとって行きなさい！！」

母はキッチンを出て行こうとする私の腕を掴んで強引に引っ張る。こういうときだけやけに力強いんだから。

「そんな暇ないって。もう……」

ずっと腕を掴んでいる母を振りほどいていけるほど私は強くない。なんといっても母は……止めておこう、考えるのも馬鹿馬鹿しい。それに折角作ってくれたのに食べずに行くなんて私には出来ないよ。

観念して私は用意されていた箸とお茶碗を持とうとした。

「駄目っ！！」

無常にも伸ばした手の甲を母は手ではじく。

私は痛む手を引っ込めてさする。

手の痛さに私は思わず声を上げる。

「痛ーいっ！！ なにすんの！！」

「メグミのはこれ」

そういうと母はトースターを指差す。

なんで私はトーストなの？

「もう、私はご飯党なんだから！！」

「今日はダメです」

すまし顔であっさりと否定されてしまった。

「それにまだトースト焼けてないじゃない!!」

「まだ、いいの。お父さん後何分？」

母の視線の先にはキッチンの隣にある居間で新聞を読んでいた父の姿があった。

父は電卓を取り出し、なにやら計算を始めた。

「走る速さを秒速5，5メートルと計算して学校までは……フムフム……」

何納得して電卓叩いてるんだか。うれしそうな父に少し腹が立つ。って、もうこんな時間じゃない!

「で、この交差点が……だから、5分23秒後に家を出れば最高のシチュエーションになる」

「そんなことどうでもいいから。私行くね」

「待てー……ー……いっ!!」

走り出そうとする私の目の前に父が立ちはだかる。

私が避けて通ろうとすると、バスケットのディフェンスのように左右に手を伸ばし、軽いステップを踏んで私に近づく。

「メグミ、よく聞け。今日……ハア……お前のクラスに……ハアハア……転校生が来る」

「え!?! ホント? っていうか何でそんな情報知ってるの?」

「それは……ハア、ハア……秘密だ」

「お父さん、息が上がって何言ってるのか分からないよ」

「ふぁう、ハアハア、たおあぁつ、ハアハアハア」

すでにディフェンスというよりも襲ってくるゾンビのようにふらふらしながら私に立ちふさがる父はどうしても変質者に見えてしまう。

あゝ、もうイライラしてきた。

「もうどいて!! 本当に私行くから!!」

父のディフェンスを本気で交わそうとするが、再び力を振り絞っ

たのか「フンフンッ!!」とか言って手をあらゆる方向に出し、通してくれない。

それどころか私のカバンを取り上げた。

「母さんパースッ!!」

「了解」

投げられたカバンを母が受け取る。

体が熱くなって何かがこみ上げてくる。

「もーっ!! もーっ!! いい加減にしてっ!!」

すると怒鳴った私を父が慌ててなだめる。

「お、落ち着け! これも全てお約束のためだ!」

「ん!? お約束?」

「はい、お父さん。解説、解説」

すると母はどこからかホワイトボードを出してきた。

いそいそと黒のペンを持って周辺の地図を書き出す父。

くだらないことでこの夫婦は息が合っている。

「ここが私たちの家だ。そしてここが、転校生のいる位置。この後、メグミが秒速5、5メートルで走り、『遅刻、遅刻』とか言いながらパンを口にくわえ学校を目指す。するとだ。なんと三丁目の交差点で二人はぶつかるのだっ!!」

力説しながら三丁目の交差点の部分をペンで何度も叩いた。

先の潰れたペンを床に捨てると、すばやく母が新しいペンを差し出す。

ペンを受け取ると顔を真っ赤にさせた父はさらに捲くし立てる。

「ぶつかり倒れた二人『痛ーっ!! もう何よ!!』」

『そっちこそ気を付けろよ!!』『なんですってー!! キーッ!

!』という具合に喧嘩を始める」

「……なにそれ」

父が熱弁すればするほど私はだんだん不安になってきた。

っていうより早く学校に行きたい。

「不機嫌になりつつもメグミは学校へ遅刻ギリギリでたどり着き、ホームルームに間に合う。そこにはなんとさっきぶつかった転校生がっ!!」

『ア、アンタはさっきの目狐男!』

『お、お前はおたふく女!』

そして二人のほのかな恋が始ま——」

「始まりませんっ!!」

はっ。

思わずツッコんでしまった。

「父さん、父親として彼氏出来るのは寂しいけど、これもお約束のためだ」

「バカ?」

だからお約束って何なのよ。

父は拳を振り上げ、全てを出し切った余韻を楽しんでいる。

よし、今のうちに学校へ行こう。

そこへ私が忍び足でキッチンを出ようとしたところを見計らうかのように父の携帯電話が鳴った。

慌てて父は電話に出る。

「もしもし、ああ隆史? うん、うん。よし」

どうやら電話の相手はお兄ちゃんらしい。

それにしても私、今のうちに出かけられるんじゃない?、

「よくやった!! 母さん、隆史が8時25分36秒、転校生を確保だ!!」

「やりましたね!!」

「何が?! っていうか、お兄ちゃんなにやってんの!!」
電話を切りながら父は涙目で言った。

「タイミングを合わせるためには仕方のない犠牲なんだ」

「どこがよ!! そんな犠牲は1ミクロンも要らないでしょっ!!」
私のツツコミに父はいち早く反応した。

「メグミ、ツツコミがベタだなあ」

「ぐっ……」

なんだか恥ずかしくなってきた。

こんな父にそんなこと指摘されるなんて……

ああ、顔が熱くなってきた。きっと私今、顔真っ赤だ。

そんな私の頭にふわりと何かが乗る。

母の手だった。

「でも、お約束ですからね」

「え? お母さん?」

そう言ってやさしげに微笑む母。

「そうなんだ、お約束。つまりはベタ」

気づいたら父も手に腰を当て、笑ってる。

なにこの家族団らんな感じは?

「ベタ最高!! ベタこそが世界の安定をもたらすのだ!」

「これで我が家も安泰ですね」

「バンザイ、バンザイ!」

夫婦二人でバンザイをする姿を見て私は再び沸々と怒りがこみ上げてきた。

「もう止めてっ!! お約束だのベタだのって!!」

私の怒りに、二人は一斉に私を見て驚いていた。

「私は今まで学校生活だけじゃなくて友達も恋愛も全部、全部、お父さんのお約束に縛られてきたの!!」

そうなのだ。こんなベタな場面を家族で演出させられるのはこれが初めてじゃない。

入学式、遠足、クラス替え、修学旅行、卒業式、ありとあらゆる行事をベタな展開に運ぶべく、私の家族は色々と工作してきたのだ。お陰で私がどれだけ迷惑してきたかこの人たちは知らないんだ。クラス替えでは常に私のクラスだけみんな同じ面子、遠足では無

理やり父が私を列から離し、迷子になったり。（友達も巻き添え）
修学旅行では母の先導で地元の学生といざこざ。卒業式では無理やり好きだった男の子の第二ボタンをお兄ちゃんがむしり取ったり。
もう、嫌っ！！

「私の生活返してよ！！」

必死の抗議にさすがの両親も黙ってしまった。

気まずい空気が流れる。

二人が少し悲しそうな顔をしたような気がした。
そんな顔したって私は怯まないから。

「何？ ホントのことでしょ！？」

すると両親は私の目の前でヒソヒソ話を始めた。
そういうことは少し離れてしてよ。

「メグミ、よく聞いてくれ」

「なに？」

父は俯き加減で声のトーンを落として話始めた。

「私たち家族は皆、平凡とはかけ離れた生活を送ってる。お母さんは『パートのくのいち』として生きてきたし、父さんは『公務員』、お兄ちゃんだって『女子高校生』として頑張ってる」

「はぁ？（ツツコミどころ満載だけど）」

「そして、お前だって本当は……いや、皆まで言うまい。せめてメグミには平凡でベタな生活を送ってほしいのだっ！！」

「これのどこが平凡なのよ！！」

すると急に父は私の両肩を掴んだ。

「平凡とは違うか？ だが、ベタだ！！ 普遍なのだよ！！」

力強く掴む父の手を私は体で感じる。

一瞬父が大きく見えた。もの凄い迫力に私は何も言えない。
久し振りに父が父親らしく見えた。

かなり強引だけど。

「ベタに生きれば先の展開に焦らず安心して生きられる。非常時に生きる家族の気持ちも汲んでくれ」

「お父さん！」

「メグミ！」

父は両手を広げ、私は駆け寄る。

私達は分かり合えたのだ。

家族を思いやること。

いいえ、何より普遍的に生きること。

それがどんなに素晴らしい事か！！

予定調和？ ノンノン。

分かっていることを楽しめる。

平凡を楽しめるって最高じゃない！！

そして二人の距離が縮まる。私は父の両腕に包まれるその瞬間――

私は父へボディブローをアッパーカット気味に打ち込んだ。

拳には重い感覚がのしかかる。

私はそれに負けないよう全てを解放すべく腕を振りぬいた。

「ぐおおおつつつ！！」

父は一瞬体を浮かせた後、膝から前のめりに崩れ落ちた。

お尻を突き出した格好でうつぶせに軽く痙攣してる。

私は倒れる父へ近づいて上から見下ろす。

「私はベタが大嫌いなもの！ あんなのただパターン化して怠けてるだけじゃない！！」

「うう……大体あってる」

「お父さん肯定しちゃ駄目っ！！」

「か、母さん。しかし……」

私は父の横を通り過ぎ玄関へ走る。

これで父は片付いた。

でもかばんは依然として母が持ったまま。

母を倒して学校へ行くのは時間がかかりそうだ。

「もうこうなったらカバンは要らない！！　とにかく学校へ行く！！」

「そうはさせないっ！！」

背後から母の声が聞こえたかと思うと、何かが私を通り過ぎて、いくつかの小さな塊が床に転がった。

不覚にもそのうちの一つを踏んでしまい、大声を上げる。

「痛っ！っ！！　なんなのこれ！！」

「撒きビシよっ！！」

振り返ると、母は声を上げ投げた体制のまま止まって決めポーズをとっている。

次に玄関を見ると、いたるところに撒きビシがばら撒かれており前へ進めない状態になっていた。

「お母さんのバカっ！！　これじゃ誰も玄関から出られないじゃん！！」

「あっ！！」

私の言葉でようやく理解したお母さんは目を開いて驚いた。

「気がつかなかった。ごめんね、お母さんくのいちだけどパートだから……」

その場に泣き崩れる母。

もちろんエプロンの端を噛んで引っ張って悔しさを演出している。そこへお父さんが芋虫のような動きで母へ近づく。

「いや、母さんは良くやったぞ」

「そんなこと言ってないで、お父さん、撒きビシなんとかしてよ！！」

「いや、その件に関しては前例がないので……」

「なに、お役所対応してるのよ！！」

「これが父さんの仕事だから……」

エヘヘ♪ とか言って頭をかく父。

な、情けない。

さらに追い討ちをかけるように父の携帯電話が鳴る。

「もしもし、どうした隆史!!」

『父さん、だめだ!! 今、警察官に職質受けてる! いや違うんです!! この格好は僕の生きざーあ~~~~~っ!!』

兄の大絶叫が携帯電話から漏れた直後、無常にも通話が切れてしまった。

その後、ツーツーツという音が私にも聞えてきた。

「隆史が警察に確保された。終わったな……」

何が終わったの? 転校生とのぶつかり計画? それとも兄の人生? どうしたって、私には嫌なことばかりじゃない。

転校生には会ってもいないのに恨まれてるだろうし、お兄ちゃんが警察のお世話になって近所の人の目が厳しくなるし。

玄関には撒きビシがまかれてるし、お父さんはうずくまって何もしてくれないし。

そして何より今からだとり割がた授業は遅刻だ。

なんでこうなるの?

私は悪くないのにっ!!

「母さん、まずいぞ。メグミが考え込んでる」

「ええ、これはお約束です」

私の中で得体の知れない感情が湧き出してくる。

ジワジワこみ上げてきたものが、加速度を増して私から吹き出すような感覚に襲われる。

頭が痛い、体が熱い!

周りの環境も私の体調も最悪だ。

もうダメ、耐えられない。

この混沌とした状況に我慢できなくなった私は叫んだ。

叫んだ瞬間、『もー』で空気が震えだした。

「絶体絶命にピンチにメグミの特殊能力が目覚めてしまった!!!」

「んなこといつてる場合じゃない、母さん避難だ」

当然、我が家も吹き飛んだ。

「お父さん。超能力者が危機に陥った場合、制御できない力を発揮するのもお約束ですね」

父は手に持つてる電卓で被害の状況を計算していた。

焼け野原のようになった周辺を見渡し反省していると、後ろから母が近づいてきた。

「どこから出してるの!？」

取り出したトーストを手裏剣の要領で私に投げると口へと吸い込まれた。

「まだ間に合うかもよ、転校生」

「ほはぁひゃん（お母さん）」

母は何も言わず、親指を上を立てて答えた。

私はなんだか胸が熱くなった。

家族っていいな、こんなことになっても私をベタに生活させてくれようとしている。

よし、それじゃあ私だって――

「ほへはぁいっへくる（それじゃあ行ってくる）」

まずは急ぐことにした。

早くしないと交差点に間に合わない。

あゝ、もう遅刻だよお。

確か秒速5，5メートルで走るんだよね？

転校生ってカッコイイかなあ……

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1643b/>

お約束家族

2010年10月8日15時14分発行